

重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの 授業に関する授業検討会の分析

－特別支援学校の経験の浅い若い教師への研修効果の検討－

姉崎 弘, 野村 和代, 遠藤 浩之

Analysis of a Study Meeting for Lesson about Lessons on
Snoezelen by the Group for Children with Severe Intellectual and
Multiple Disabilities

-Examination of Training Effectiveness for an Inexperienced Young
Teacher in a Special Needs School for Children with Physical Disabilities-

Hiroshi ANEZAKI, Kazuyo NOMURA and Hiroyuki ENDO

2019年11月8日受理

抄 録

団塊の世代の大量退職に伴い、今日学校現場では20代、30代の若い教師が多くなっており、その育成が課題となっている。特別支援学校等で集団によるスヌーズレンの授業が主に実践されているが、先行研究では個別指導に関する報告がほとんどである。そこで本稿では、集団によるスヌーズレンの授業を取り上げて、放課後のSVと教師による授業検討会を月1回程度開催し、授業改善に向けた協議を行った。特に経験の浅い若い20代教師を事例に、毎回の発言回数・発言時間・発言内容のポイントについて分析した結果、回を重ねるごとに、自ら実践的な探究を深め、少しずつ自分の考えを述べられるようになり、研修効果が認められた。その要因として、SVや先輩教師の発言に耳を傾けて学ぼうとした主体的な研修姿勢があげられた。今後の課題として、授業検討会で協議した内容を実際の授業づくりに反映させること、集団によるスヌーズレンの授業の分析・評価等を行う必要がある。

キーワード：重度・重複障害児、スヌーズレン、授業検討会、研修効果、教師教育

I. はじめに

肢体不自由特別支援学校のスヌーズレンの授業に関する全国調査結果によると、集団指導が7割を超えていることが報告されている(姉崎, 2019a)。しかしこれまで、主に個別指導場面におけるスヌーズレンの授業の有効性に関する研究報告が多く(加藤, 2013; 後藤, 2014; 藤澤・姉崎, 2016; 藤澤・姉崎, 2017)、一方集団指導場面を取

り上げた研究としては姉崎（2003）等が散見されるが、あまり多くないのが現状である。今日、スヌーズレンの授業が主に集団で実践されているため、集団としての授業づくりや授業改善のあり方が求められている。

団塊の世代の大量退職が2007年から始まり、それに伴い、学校教育現場でも、いわゆるベテランと呼ばれる教師が以前に比べて少なくなっている。このため、今日特別支援学校現場においても、若い20代・30代の教師が多くなってきている。このことから、以前に比べて学校の教育力の低下が懸念される。従って、学校現場で経験の浅い若い教師をいかに育てていくか、ということは大きな課題となっている（姉崎, 2019b）。本研究は、このような問題意識のもとに取組んだ。

そこで本稿では、重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業を取上げ、この授業の改善に向けて、月1回程度、放課後に担当教師と研究者による授業検討会を継続的に実施し、特に経験の浅い若い教師を事例に、その成長を目的にした研修のあり方と継続的な取組みから見えてきたこのような研修会の持ち方について検討したので報告する。

II. 方法

1. 分析対象

I 県J 肢体不自由特別支援学校小学部の重度・重複障害児の集団によるスヌーズレンの授業を担当する教師5名と研究者1名（研究者はSV：スーパーバイザーとして指導・助言および司会を担当した）による放課後の授業検討会の発言。

なお、教師は20代D 1名、30代E 1名、40代F・G 2名、50代H 1名の計5名である。1名を除いてスヌーズレンの授業経験が浅い集団である。経験の浅い若い教師は教師Dで、事例児Aの担当である。

2. 期間：201 X年5月～201 Y年2月

3. 対象児

児童5名のクラス。その内3名（A児・B児・C児）を事例児として、毎回その指導について授業検討会で話し合いを行った。

4. 対象授業

月に1回程度で、月曜日4時限の授業（授業をVTR録画した）、5・6・7・9・11・12・2月の計7回を対象にした。10月は教師1名が欠席したため、分析対象からは除外した。その理由は、教師が1名欠けた場合でも、毎回の話し合いの内容に影響を与えるからである。事例児の様子や指導の反省、次回に向けて質問や改善点、SVも適宜質問に答え意見を述べた。事後に、研究者と共同研究者1名が授業VTRを元に主な改善点をリーダーの教師Fに毎回メールで伝えた。なお、授業検討会もVTRに録画した。

5. 授業検討会

対象授業が実施された日の放課後に毎回授業検討会を行った。年度当初に、毎回の授業記録表（事例児側の数量・記述評価、教師側の評価）と感覚面の評価用紙を用意

した。研究者が月1回学校訪問の折、放課後の約80分間で実施した。主な内容は、主授業者による授業の説明と反省、授業の一部を抽出したVTR視聴（20分程度）、事例児の様子や指導の反省、次回への質問や意見、SVによる指導助言である。

6. 分析方法

分析にはKHCorderを用いると共に、授業検討会場面のVTRの文字起こしした文章を、研究者が開発した表1の分析表（注）を元に各カテゴリーに分類し、教師名と発言回数・発言時間・発言内容を整理した。各カテゴリーに分類する際の研究者2名間の分類の一致率は約77%であった。また、事後に授業検討会を振り返って、参加した教師に気づいた点をあげさせた。

表1 授業検討会の分析表 20●●年▲月

	機能したカテゴリー		教師名	発言回数(回)・発言時間(秒)	合計(回)
SV側	1	誠実な態度 (共感的姿勢・自己反省)			
	2	具体的な指導			
	3	情報の提供または要求			
	4	問題点の指摘			
	5	指導方策の提供又は要求			
			合計		
教師側	6	誠実な態度 (共感的姿勢・自己反省)			
	7	情報の提供または要求			
	8	実践的自己探求			
	9	問題点の指摘			
	10	指導方策の提供又は要求			
			合計		

発言回数	SV	回				SV側	計	回
	D	回、	E	回、	F	回、	G	回、
						H	回	
						教師側	計	回

Ⅲ. 結果

1. KH Corder による授業検討会全体の抽出語（頻出順）の分析結果

頻出順位	抽出語	出現回数	頻出順位	抽出語	出現回数	頻出順位	抽出語	出現回数
1	時間	197	16	学校	64	31	考える	46
2	見る	192	17	個別	63	32	自分	46
3	授業	165	18	出来る	62	33	少し	46
4	スマーズレン	164	19	自立活動	60	34	指導	44
5	先生	134	20	話	58	35	持つ	41
6	子ども	132	21	出る	57	36	前	41
7	良い	110	22	刺激	54	37	教材	40
8	活動	98	23	難しい	53	38	他	40
9	言う	97	24	今	52	39	分かる	40
10	目標	94	25	リラックス	51	40	入る	38
11	今日	90	26	感じる	51	41	反応	38
12	使う	87	27	寝る	51	42	必要	37
13	子	76	28	評価	49	43	B児	36
14	A児	72	29	感じ	47	44	課題	36
15	集団	71	30	手	47	45	覚醒	36

図1 授業検討会全体の抽出語（頻出順）の分析結果

図1において、毎回の授業検討会全体を通じて、頻出度の多い抽出語は、「時間」「見る」「授業」「スマーズレン」「先生」「子ども」の順であった。1回45分の授業をどのように構成するか、子どもたちの物を見る力（注視力）をいかに高めるか、スマーズレンの授業をどのようにつくっていくか、教師と子どもの関わりはどうしたらよいか等の内容が教師たちの主な話題となっていた。

2. KH Corder による授業検討会の抽出語共起ネットワーク分析—各回の発言に注目して

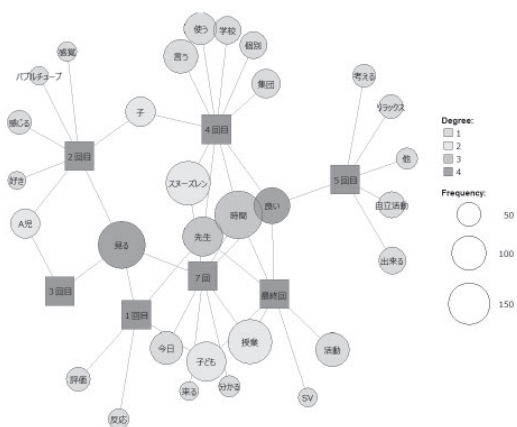
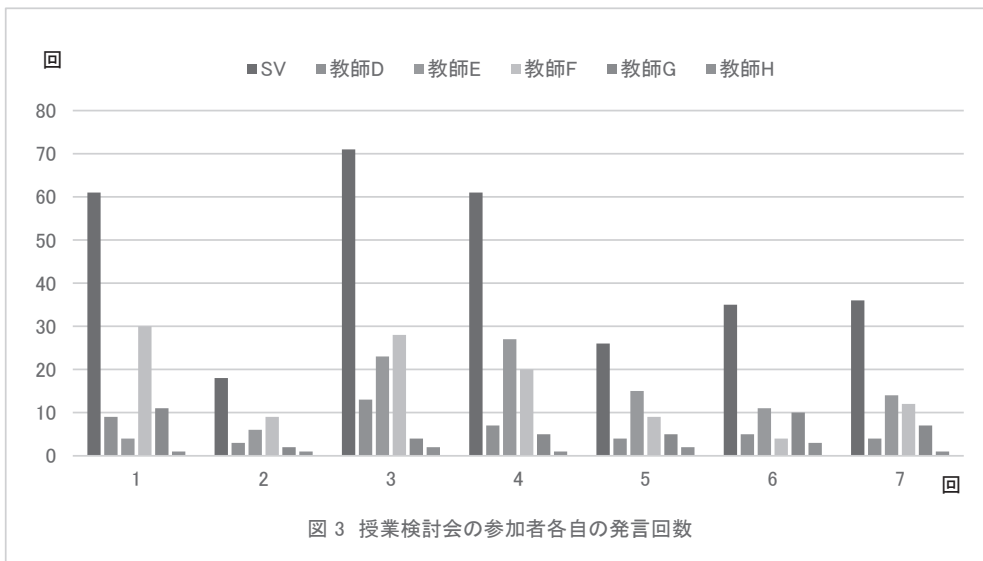


図2 授業検討会の抽出語共起ネットワーク分析—一回ごとの発言

図2において、各回ごとの主な発言に注目すると、1回目は「見る」「先生」「今日」、2回目は「見る」「A児」「子」「感じる」、3回目は「見る」「A児」、4回目は「時間」「スマーズレン」「先生」「良い」、5回目は「良い」「自立活動」「リラックス」「出来る」、6回目は「見る」「時間」「授業」「先生」「子ども」、7回目は「時間」「授業」「先生」「良い」「活動」に関する発言が多く見られた。全体的に、子ども一人一人の指導のことから授業の作り方や教育課程のあり方まで、回を重ねるごとに話題が広がっていった。

3. 毎回のSVと各教師の発言回数

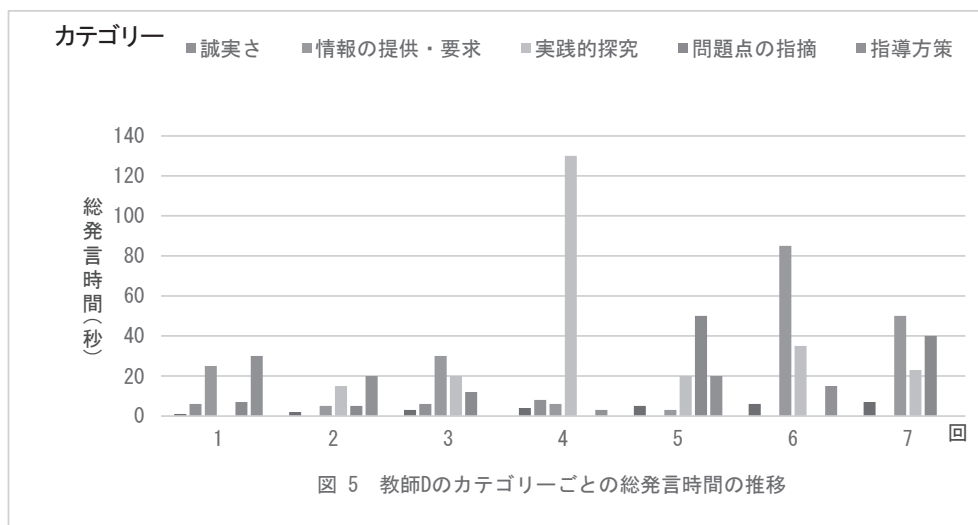
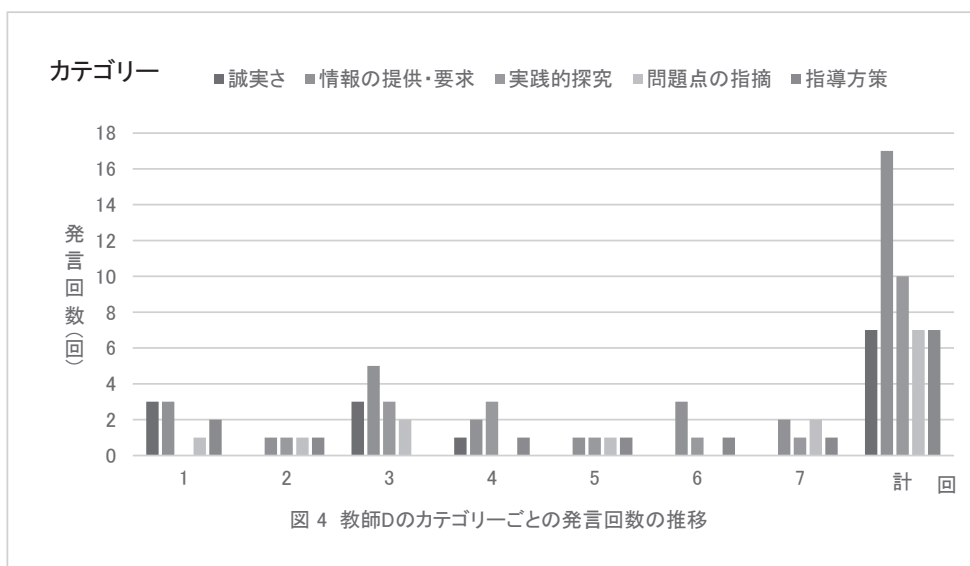
図3は、毎回の授業検討会の参加者(SVと各教師)各自の発言回数を示す。今回は、簡単な返事のやり取りや相槌も1回にカウントした。これを見ると、全体的には、毎回SVの発言回数が最も多かったが、5回目以降は50～70%程度減っていた。またリーダーの教師Fは5回目以降発言回数が30～50%程度減っていた。一方、経験の浅い若い20代の教師Dは4回目以降は発言回数が減った。また30代の教師Eは3～5回目で発言回数が比較的多かった。40代の教師Gは1・6・7回目の発言が比較的多かった。50代の教師Hは事例児の担当ではなかったが、毎回1～2回程度の発言が見られた。



4. 経験の浅い若い教師Dの毎回の発言回数・総発言時間・主な発言内容のポイント

教師Dの毎回の発言回数の推移を図4に示した。毎回の総発言回数は4回から14回までで平均6.3回であった。また教師Dの毎回の総発言時間を図5に示した。4回目以降は、発言回数は少し減ったが、その分1回の発言時間がより長くなったことから、じっくり考えて発言するようになった。特に、図5において4回目に、担当する

A児の指導について130秒間にわたり「実践的自己探求」の発言が見られた。この回以降、「情報の提供・要求」「問題点の指摘」「実践的自己探求」に関する発言時間が増えた。ただし、次回の授業の指導方策に関する発言はあまり見られなかった。



さらに表2に、教師Dの毎回の主な発言内容のポイントを示した。教師Dは回を重ねるごとに、発言内容が、①A児の情報提供や指導目標の設定、②指導方法の探求、③SVへの質問と実践的探究、④自らの指導を振り返り、実践的に探究する、⑤A児の行動の解釈や授業改善の方策を出す、⑥教材の工夫への意欲、⑦指導を振り返って反省

し、評価に関して自分の所見を述べる、と前向きに変容していった。全体的に、教師DはA児の指導のあり方をめぐって、授業検討会に積極的に参加して自らの考えを述べるとともに、スヌーズレンの書籍を求めると、自ら主体的に研修を深めていった。

表2 毎回の教師Dの主な発言内容のポイント

回数	主な発言内容のポイント
1	・担当するA児に関する情報提供や指導目標の設定と指導の所見を述べる。
2	・A児の指導目標を達成するために、どのような方法があるかを探求する。 ・A児の指導中の様子から指導のヒントを得る。
3	・A児の指導に関するSVへの質問が出る。 ・A児の指導に関する現状報告と実践的探究を行う。
4	・自分の指導を振り返り、疑問点を出す。 ・それについて、自ら考えを深めて実践的に探究する。
5	・A児の行動について自ら解釈をめぐらす。 ・次回に向けて、授業改善の方策を考え出す。
6	・授業中にA児が活動に飽きてきていることを指摘する。 ・次回に向けて、教材の工夫をしていきたいと意欲を示す。
7	・A児の気持ちになって、指導を振り返り、指導を反省する。 ・足湯だとリラックスしているのか、評価が難しいと所見を述べる

5. 授業検討会における教師Dの事例児Aに関する主な話題

全7回の授業検討会の発言内容を文字起こしした文章を元に分析した結果、回ごとの発言内容に注目すると、教師Dの担当したA児については、他の事例児に比べて指導の課題が多かったことから、授業検討会の中でも特に話題に上った。

A児は物をしっかりと注視する力が弱いため、本児の主な指導目標である「見る力をつける」という話題から、学校で日中寝入ることがあるため、本児の覚醒度をいかにして高めるか、時々興奮して大きな声を出したりすることがあるため、本児をどのようにしてリラックスさせて情緒の安定を導くかなど、話が多岐にわたった。このようにスヌーズレンの授業づくりと本児の指導のあり方を関連づけて協議が行われた。

6. 授業検討会後の教師からの意見

7回にわたる授業検討会終了後の後日、参加した3名の教師から授業検討会について以下の意見を聴取した。なお、この時転勤等の理由から参加できない教師がいた。

- スヌーズレンの授業研究をそのような形で取組めたことは良かった。スヌーズレンルームでの活用が本校の教師に報告できたことは、本校の教師が考えるきっかけになった。
- スヌーズレンの授業でリラクゼーション以外の使い方があることがわかり、本校の職員にとってよい勉強になった。
- SV による VTR の指導場面に関する助言やコメントの時間がもう少し長いと良かった。
- SV が来ない日も週 1 回話し合いを行っていたので、授業検討会が自分たちの指導を整理する場にもなっていた。

また、経験の浅い若い教師 D からは、以下のような意見が出された。

- スヌーズレンについての知識が少なく経験も浅かったため、指導助言などをただで良かった。
- 授業検討会以外のクラスでの話し合いは質が異なるが、話の内容が整理されていきミニ研修になり良かった。
- 授業検討会は時間が限られていて、自分の考えを整理するまでに時間もかかり、難しかった。
- VTR 画面の振返りについては、もう少し SV からコメントをもらえればよかった。
- SV が来るので SV に聞きたいという気持ちが先になり、SV への質問が多くなり、授業そのものについての話し合いが比較的短くなったように感じる。
- グループリーダーの 40 代教師 F が主に SV とやりとりをしていたので、自分が発言するよりも F 先生に任せた方がチグハグがなく、わかりやすいと考えていた。また自分が話すタイミングをうまく見つけられなかった。

IV. 考察

1. 経験の浅い若い教師を育成する研修のあり方について

スヌーズレンは、統制された環境のもとに行われるため、できるだけ静かな環境設定での取組みが求められるといわれる（姉崎,2019c）。今回あえてスヌーズレンの集団による授業を取上げたのは、前述したとおり、全国の多くの学校が集団でスヌーズレンの授業を行っていることから、その授業づくりに少しでも資することを目的として、授業改善を図るために授業検討会を教師たちと協働して実施した。なお、集団によるスヌーズレンの授業そのものの分析は、紙面を改めて論じることにはしたい。

本稿では、経験の浅い若い教師 D を事例に、どのような研修会（ここでは授業検討会）の持ち方が若い教師を育成していく上で有効かを論じたいと思う。計 7 回授業検討会を実施し、KH Corder による分析（図 1・図 2）、さらに毎回の授業検討会の話し合いの内容を文字起こしして、教師 D の発言内容をカテゴリーに分類し、発言回数や総発言時間をグラフに示した（図 3・図 4）。

さらに、教師Dの毎回の主な発言内容のポイントを整理することで、全体的に教師DはA児の指導のあり方をめぐって、授業検討会に積極的に参加し、自ら主体的に研修を深めていったと考えられる。この要因として、教師Dが自ら進んでSVや先輩教師の発言内容に耳を傾けて学ぼうとしていた研修姿勢があげられる。この点で、今回の授業検討会は、教師Dにとって自分自身を高めるよい研修の機会になっていたと考えられる。授業検討会は、時間が限られており、その中で効果的な話し合いを行うことは毎回試行錯誤の連続であったが、時間が限られているからこそ、集中的に考える力が高められたとも考えることができる。

教師Dは、事後の意見の中で、授業検討会を振返って、発言はグループリーダーの教師Fに任せていたと述べている。ここには、月に1回SVが本校に来た時に実施した授業検討会とは別に、教師たちは週1回スヌーズレンの授業づくりについての話し合いをしていて、そこで話し合われた内容を代表の教師Fが授業検討会の前までに整理を行い発言をしていたことから、教師Fの発言には教師Dや他の教師たちの意見も含まれていたと考えられる。しかし授業検討会は、教師たちがお互いに研修を深め合う場であり、教師としての専門性を培う場にもなっていることから、この場で各教師が自分の考える意見をしっかりと述べるのが何よりも求められている。教師たちの意見を集約した特定の教師からの発言だけでは、教師全員による教員研修としては不十分なものになってしまうのではないかと懸念される。

学校では、一般的に、若い教師は経験と力量がないこともあり、あまり積極的に意見を述べられない場合がある。特に、多くの先輩教師を前にして、遠慮があったり、チグハグなことを言わないだろうかと心配している。しかしこのことは、当然のことである。また教師Dは、話を切り出すタイミングを見つけにくかったと述べていた。

そこで、SVと司会の両方を担当した研究者は、1回目から3回目までの発言を振り返り、教師Dの発言時間がきわめて短いことがわかった(図5参照)。逆にSVと教師Fは毎回の発言回数が多く、教師FはSVの次に発言回数が最も多かった(図3参照)。そこで研究者は、4回目以降はSV自身も、また教師Fも発言回数を控えてもらうように、事前に他の教師を通じて配慮してもらうように指示をした。その結果、SVと教師Fの発言回数が減っていき、一方、教師Dは4回目以降、発言回数は少し減ったが、その分1回ごとの発言時間が少し長くなり、比較的短時間で自分の話す内容を考えて発言できるようになっていった(図5)。この点で、今回の授業検討会は教師Dにとって研修効果があったと考えられる。子どもたちが下校して程なくして授業検討会を始めたことから、時間のない中、授業中の子ども側と教師側の評価を記録用紙に記入して、それを授業検討会までに参加者用にコピーを取るなど、毎回慌ただしかった。しかしこの短い時間の中で、自分の考えをまとめる、整理する力を付けていくことが教師の力量形成につながると考える。リーダーの教師Fはいろいろ発言したい気持ちがあったと思われるが、そこを押さえて、若い教師に発言する機会を保障して譲ってあげた。このような配慮も、授業検討会の中ではベテラン教師の大きな役割ではないだろうか。この辺りのことについては、反省になるが、事前の根回しや

SV と教師間で十分な共通理解を図る必要であったと考えられる。

授業検討会では、年齢や経験、性別の異なる教師たちがいる中で、他の教師の自分とは異なる考え方や意見の中からいかに学びを深めていくか、次回の授業に生かせる良いものを吸収して、いかに授業の改善に向けて提案をしていくか、さらに皆の前でいかに堂々と自分の考えや教育観、指導観を述べられるかが問われており、まさに教員研修の場になっている。若い教師の成長は、短い日数では当然無理があり、長い目で温かく見守っていく必要がある。今日若い教師が自ら進んで先輩教師や書籍・論文からも学び取ろうとする姿勢や態度を育成することができるような職場環境のあり方が求められている。そのためには、若い教師の模範や目標となるベテラン教師の姿が必要である。教師たちがお互いの良いところを認め合い、褒め合えるような職場環境が理想である。

2. 授業検討会の持ち方について

授業検討会は毎回約 80 分間行われたが、主授業者による授業の反省や VTR の視聴を除けば、約 45 分程度しかなく、この中で質問の受け答えや 3 名の事例児の報告と次回の授業に向けた課題を整理したり、授業づくりについての意見交換を行った。今回は、スヌーズレンについてあまり知らない教師が多かったことから、SV への質問とそれに対する SV による丁寧な受け答えに時間を費やすことの多い授業検討会になったが、今回このことは当然の結果であったと考えられる。

また今回、SV の方から、授業について教師に「このようにしたらいいと思います。」といった発言はできるだけ控えるようにした。その理由は、教師はすぐにやり方や答えを求めていると専門家である SV に質問してることがあるが、この部分は、教師自らがいろいろと考え、検討を重ねて自ら見出していく部分であると考えているためである。SV がすぐに答えや助け舟を出さないことは、教師本人の成長を促す上で大切なことであると考えている。

この授業検討会を通して、教師に願ったことは、SV へ質問するだけではなく、できるだけ、自分の力で今日の授業の問題点を指摘し、それを実践的に探究し、次回のより良い授業に向けて具体的な指導方策（改善策）を提案できるようになることである。この授業検討会の目的は、授業検討会が始まった最初の頃に、SV が何度か教師に説明を行っている。

発言内容が、授業についてだけでなく、本校の自立活動や教育課程、子どものグループ分けのあり方にまで広がっていったことは、一つの成果であったと考えられる。それだけ、教師の日々の子どもの指導や授業に関する問題意識が高まっていった結果であり、次回の授業改善に向けて、たとえ結論が出なかったとしても、次につながる有意義な話合いの場になっていたのではないかと考えられる。

また司会者を SV ではなく、事例児担当以外の他の教師にお願いした方がよい面もあったと考えられるが、研究開始当初、SV が授業検討会を仕切っていたことから、

司会者については、SVが自分しか担当者がいないと考えたのが実情である。反省として、司会者を含めて授業検討会の全体計画を事前に十分検討する必要があったと考えられる。

今回の授業検討会に関する実践的研究で、教師Dが次回の授業改善に向けて自分自身の考えを少しずつ述べられるようになっていったということは、それだけの力量を培ったということであり、今回の研修成果の一つであったと考えられる。

V. 今後に向けての課題

今後の課題として、以下があげられる。

第一に、教師の成長は、会議の発言回数や発言時間で測れるものではないことは確かである。そこでは、特に発言内容の質が問われていると考える。そして実際に授業検討会で協議された内容が、次回以降の授業に少しでも反映され授業改善が図られていくことが重要である。これをチェックできるシステムを検討する必要がある。

第二に、教師が実践した今回の集団によるスヌーズレンの授業そのものに関する分析・評価は、今回の授業検討会の評価と関連させて今後行う必要がある。

第三に、今後は、次回の授業改善に向けて、教師一人一人が指導方策を具体的に提案することができる力量を培うことが課題であり、そのための日々の教師の研修のあり方について検討する必要がある。

第四に、授業検討会で授業のVTRを全て視聴した場合には約40分かかるため、話し合いをする時間が足りなくなる。VTRの視聴や授業者の反省、協議等の各時間を、授業検討会の中でどのように時間配分するのが最もよいのか、実践を通じてさらに検討を加える必要がある。

[付記]

本誌への事例の掲載については、倫理面に十分配慮を行い、事前に保護者・関係機関の同意を得ている。

本研究は、2019年度常葉大学共同研究費および2019年度日本教育公務員弘済会本部奨励金の支援を受けた。

謝辞

本研究にご協力をいただいた肢体不自由特別支援学校の先生方に心より深謝を申し上げます。

(注)

表1の「授業検討会の分析表」は、姉崎 弘が1989年に言語治療の分野で、ケース会議用の検査バッテリーとして開発した「分析表」に改良を加えたものである。姉崎 弘・岡部克己(1989)言語治療におけるケース会議用検査バッテリーの開発と有効性の検討について、心身障害学研究, 13(2), 33-48. を参照。

文献

- 姉崎 弘・岡部克己(1989) 言語治療におけるケース会議用検査バッテリーの開発と有効性の検討について. 心身障害学研究, 13(2), 33-48.
- 姉崎 弘(2003) 重症心身障害児教育におけるスヌーズレンの有効性について—肢体不自由養護学校の自立活動の指導に適用して—. 日本重症心身障害学会誌, 28, 93-98.
- 姉崎 弘(2019a) 肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のスヌーズレンの授業に関する全国調査研究. 特殊教育学研究, 56(2), 281-292.
- 姉崎 弘(2019b) 特別支援教育を充実するための教職員の専門性向上に向けて. 教育時評, 48, 9-13.
- 姉崎 弘(2019c) (監修・編著) スヌーズレンの理論と実践方法—スヌーズレン実践入門—. 大学教育出版, 26-27.
- 藤澤 憲・姉崎 弘(2016) 重度・重複障害児へのスヌーズレンの授業の工夫—子どもの活動の主体性を育む手作りスヌーズレン環境を目指して—. スヌーズレン研究, 3, 12-22.
- 藤澤 憲・姉崎 弘(2017) 重度・重複障がい児のスヌーズレン授業実践における数量的分析の試み—手作りのスヌーズレン環境における三項関係に視点を当てて—. スヌーズレン教育・福祉研究, 1, 42-55.
- 後藤尚子(2014) スヌーズレンの活用について. スヌーズレン研究, 2, 14-22.
- 加藤直子(2013) 「お湯ベッドでリラックス」—訪問教育の現場から. スヌーズレン研究, 1, 26-29.